

2025年度 熊野町つなぐプロジェクトレポート

【 担当教員 】

学部・学科・専攻	職名	氏名
代表者 地域共創センター	准教授	三上 賢治

【 プロジェクトの概要 】

目的

熊野町つなぐプロジェクトは、2023年度から広島県安芸郡熊野町をフィールドとして、地域で活躍する人々や事業者と学生が継続的に関わりながら、地域資源の魅力を再発見し、その価値をデザインの力で社会に伝えることを目的として実施してきた地域展開型芸術プロジェクトである。

本プロジェクトでは、熊野町役場および地域メンバーとの連携のもと、学生が現地に足を運び、地域の文化・産業・歴史・暮らしに直接触れながら、地域課題や魅力を自らの視点で捉え直し、それを可視化・発信する実践に取り組んできた。単なる制作活動にとどまらず、地域の関係者との対話や協働を通して、学生が社会と接続されたデザインの役割を学ぶ機会を創出してきた点に本プロジェクトの大きな意義がある。

2025年度は、3年間の取組の集大成として位置づけ、熊野町で唯一の酒蔵であり、130年以上の歴史を有する株式会社馬上酒造と協働した。日本酒の製造工程や蔵の歴史、地域に根ざした酒造りの営みを学びながら、日本酒ラベルのデザイン提案、販売イベントの企画、お酒造りに関する冊子制作等に取り組む、特に夏季における日本酒消費の低下という課題に対して、デザインを通じた新たなアプローチを試みた。

こうした3年間の活動を通じて、本プロジェクトは、地域資源を「学ぶ対象」として捉えるだけでなく、地域とともに新しい価値を創出する「共創の対象」として位置づける教育実践へと発展してきた。

実施内容

2025年度は、芸術学部デザイン工芸学科の1・2年生7名が参加し、地域や事業者との協働のもとで実践的に学びを深めた。学生たちは、実際に酒蔵を訪問し、仕込み体験や蔵見学を通じて日本酒ができる過程を理解するとともに、現場で使われる道具や製造環境に触れながら、デザインがどのように商品価値や販売促進に寄与できるかを検討した。

また、学内外でのミーティングやプレゼンテーションを重ねながら、地域側・事業者側からの意見を受けて案を修正し、実装可能性の高い提案へと磨き上げていった。最終的には、ラベルデザイン案の完成に加え、実売の現場を見据えた検討も行い、デザインの有効性を社会との接点のなかで検証することを目指した。

【2025年度の主な活動経過】

- 4月12日 馬上酒造仕込み体験、蔵見学、顔合わせ
- 4月23日 大学プロジェクトメンバー・ミーティング
- 5月23日 学内ミーティング
- 5月31日 西条酒蔵視察(広島の日本酒の歴史・デザインリサーチ)熊野町役場へのヒアリング
- 6月6日 学内ミーティング(一次デザイン案プレゼン・意見交換)
- 6月27日 学内ミーティング(一次案修正版の提案)
- 7月5日 熊野町にて一次プレゼンテーション
- 7月11日 学内ミーティング(二次デザイン案プレゼン・意見交換)
- 7月25日 学内ミーティング(二次デザイン案修正・確定)
- 7月26日 馬上酒造にてデザイン案プレゼンテーション
- 8月30日 修正版提案・確定、印刷調整・試し刷り・修正
- 9月 最終印刷・完成

なお、本年度に至るまでの3年間にわたり、熊野町の人や地域資源との継続的な関わりを積み重ねてきたことで、学生が地域に対して主体的に関心を持ち、信頼関係を前提とした提案活動を行える基盤が形成された。





【プロジェクトでの成果等】

本プロジェクトの成果は、第一に、3年間にわたる継続的な地域連携を通じて、熊野町における大学と地域の協働関係を着実に深めることができた点にある。単年度の関わりではなく、同じ地域に継続して関わることで、学生・教員・自治体・地域住民・事業者のあいだに信頼関係が醸成され、地域課題や地域資源への理解もより立体的なものとなった。これにより、学生が外部者として一時的に関与するのではなく、地域とともに考え、提案し、試行する実践的な学びの場が形成された。

第二に、デザインを通じて地域資源の魅力や可能性を再編集し、社会に向けて発信する具体的な成果を生み出すことができた点である。2025年度においては、馬上酒造との協働を通じて、日本酒という地域の歴史的・文化的資源を題材に、ラベルデザインや冊子制作、販売企画の検討に取り組んだ。特に、学生が製造現場を体験し、蔵の歴史や造り手の思いを理解したうえで提案を行ったことにより、表層的な意匠にとどまらない、背景や物語性を踏まえたデザイン提案につながった。

第三に、学生にとって、地域社会の現場でデザインの役割を実践的に学ぶ貴重な教育機会となった点が挙げられる。制作物を完成させること自体が目的ではなく、地域側の声を聞き、課題を整理し、複数回のプレゼンテーションや修正を経て提案を深化させるプロセスを経験したことで、学生はデザインに求められる社会的役割、コミュニケーション力、調整力、構想力を総合的に養うことができた。特に、実際の事業者とのやり取りや現場での検証を通じて、自らの表現が社会の中でどのように機能するのかを考える姿勢が育まれたことは大きな教育的成果である。

第四に、地域資源の新たな活用可能性を示した点も重要である。熊野町で唯一の酒蔵である馬上酒造は、地域の歴史や文化を体現する存在である一方、現代の消費動向の変化のなかで、新たな伝え方や販路の工夫が求められている。本プロジェクトでは、特に夏場の日本酒消費低下という課題に着目し、若い世代や新たな購買層に向けた見せ方・伝え方をデザインの側面から検討した。これは、地域の伝統産業に対して学生ならではの視点を持ち込み、新たな可能性を提示した実践として意義がある。

さらに、3年間を通じた取組は、熊野町という地域を単なる活動場所としてではなく、学生にとって学びと関係形成の場として位置づけることに成功した。地域に継続して通い、人と出会い、対話を重ねるなかで、学生たちは地域の魅力や課題を自分事として捉えるようになり、大学での学びと社会との接点を実感することができた。こうした経験は、今後の制作活動や進路選択、地域との関わり方にも影響を与えることが期待される。

以上のように、本プロジェクトは、

- 地域との継続的な信頼関係の構築
- 地域資源を活かしたデザイン提案の実践
- 学生の実践的・社会的学びの深化
- 地域資源の新たな価値創出の可能性提示

を実現した取組であった。3年間の積み重ねにより、地域展開型芸術プロジェクトとしての教育的意義と社会的意義の双方を具体的に示すことができたといえる。